

エセックス大学の国際貧困セミナーに出席して

平 恒 次

ヨーロッパ国際貧困研究会という、デンマークの国立社会研究所所長のフリース教授を長とする、社会学者の小さな集りがある。筆者がこの研究会を知ったのは、1965年9月、国際労働事務局(ILO)に在職中、パリーの経済協力開発機構(OECD)の社会部主催で開かれた、低所得者問題に関する専門家会議に出席したときである。この会議の議長に予定されていたフリース教授が、ついでに彼の研究会にも出てくれるよう、関係者にさそいをかけたことが、きっかけである。こうして、1965年9月30日、フランス外務省の建物の一室をかりて開かれた、国際貧困研究会の第1回セミナーに出席したわけである。

当日は、午前中、貧困層の停滞性に関する概念規定と、パリー近郊のスラムについての報告があり、午後は、貧困の測定に関して、エセックス大学社会学教授タウンゼンド氏の報告を中心に討論が行われた。その席上、さそいによって、公的扶助の扶助基準と貧困の認識について、問題点を思いつきそのまま、指摘しておいたことが、今回、同研究会主催で開かれたエセックス大学の国際貧困セミナーに出席する遠因になったわけである。

エセックス・セミナーに入る前に、この国際貧困研究会について略記しておこう。その中核をなすものは、パリーの救貧協会の社会調査部で、部長は、ヴェンステーンウイクという婦人である。女史は、1960年現職に就任して以来、1965年までに、貧困に関する大がかりな国際会議を2、3度招集したことがあるぐらいに、社会事業における経験と、研究の深さで名声の高い人である。1965年9月のパリー・セミナーの後、ほどなくして、国際貧困研究会は、タウンゼンド教授を招集者として、英国コルチェスター市にあるエセックス大学で、かなりの規模のセミナーを開くべく

決定した模様である。時期は、はじめは、1年後の1966年9月の予定だったのを、国際社会学会が同種の問題について、フランスのエヴィアン市でその頃大会を開くことになっていたので、重複をさけるために今年の4月にもちこしたということである。この社会学会の招集者は、ニューヨーク大学、フォード財団兼務のマイク・ミラー教授で、この人は、今回のエセックス・セミナーでもラポルターとしてきわめて重要な役目を果たことになるのである。

今回のセミナーは、国際貧困調査会主催、パリー救貧協会協賛、ラウントリー信託金庫の財政援助という陣立てで、フリース教授を会長、タウンゼンド教授を招集者として、4月3日から6日にわたる大規模のセミナーだった。セミナーは常時50人以上の公式、非公式の参加者を擁するという盛況だった。報告は、大まかに、総論的なものと、各論的なものがあり、両者は、それぞれ、問題意識と方法によって、2、3の大項目にわかれるように思えた。この視角から分類すれば下記のとおりである。なお、各報告は原文どおり、稿末に再録しておいた。

1. 総論
 - イ 社会階層構造と貧困 (3編)
 - ロ 貧困線または貧困層の測定 (3編)
2. 各論
 - イ 特定貧困者群に関するもの
 - (i) 高齢者 (2編)
 - (ii) 都市貧困者 (2編)
 - (iii) 農漁村貧困者 (1編)
 - ロ 貧困の特定原因または特定現象に関するもの
 - (i) 住居と貧困 (1編)
 - (ii) 貧困と食生活 (1編)

3. 関連諸問題

意識および生活実態調査の結果とその問題点
(3編)

4. 貧困対策

自由討論

貧困総論の皮切りには、セミナーの招集者タウンゼンド教授が、階層構造を国内的かつ国際的現象としてとらえ、貧困の必然性と相対性について力説した。タウンゼンド氏はつとに、老齢と貧困の問題で著名な研究を発表しており、最近はロンドン大学のアベルスミス教授等と組んで、英国における貧困の測定において業績をあげている。ベヴァリッジ以降の英国における貧困の増大を実証して、福祉国家への努力の弛緩をすどく戒めている進歩的学者である。第1次貧困線、第2次貧困線という感覚はもはや政策意義はないとして、社会が依然として階層的に編成されている以上、貧困はなくならないと、格調の高い文章で力説したのが今度の報告である。

社会構造の必然的一面として貧困をとらえる試みとして、コロンビア大学のガンス教授の報告があった。これは、オスカー・リュイスに始まる貧困社会学が、貧困の停滞性を強調するあまり、政策の貧困に陥る危険があることを指摘し、政策的立言にとっても有意義な動態的貧困論を志向する労作である。さらに、セミナーのラポルターであるミラー教授が、名声、権力、所得等の諸変数による階層分類を行い、これらの変数の質的・量的欠如として貧困をとらえ、その再分配による貧困階層の社会的・政治的・経済的地位の改善への政策的努力を強調した。

貧困総論の第2部に属するものに、貧困の計量がある。これにも二つの部門があって、一つは貧乏線とよばれてきた所得水準の計測とその合理性の問題であり、他は、貧困層ないし低所得者層の数量的把握に関するものである。貧乏線に関しては、ペンシルバニアのレイン教授が、最近の諸家の業績を網羅して批判するという論争的な報告を行い、討論誘発に大いに益するところがあった。アベルスミス教授は、世帯員数と世帯の生活水準との関係について、2, 3の諸国における取扱い

の差異を指摘した。一国内においても関係省間に(例えば厚生・大蔵・労働省等のごとく)、世帯員数と生計費との調整には、即座には説明できない差があるものであるが、国際間にはそれに輪をかけて、問題が複雑になる。配偶者の価値、子供1人の値打ちが、諸国の社会保障制度間にこうも違いがあるのかと、いまさらのように不思議な感じをさせられた。筆者も、アベルスミス、タウンゼンド氏等と類似の方法による貧困測定に日頃興味をもっているもので、その一部を報告しておいた。

貧困各論でも、2部門が識別された。特定の貧困者群に関しては、待望のパリー救貧協会長ウレジンスキー神父の報告が、神父の不時の病気で、沙汰やみとなったことはきわめて残念だった。ミュンケ夫人のベルリンにおける都市貧困者、ブルーム教授のドイツにおける老齢困窮者、オーベルト教授のノルウェーにおけるラップ族の貧困、ウエダバーン女史の3カ国(英、米、デンマーク)における老齢者の生活水準比較は、すべて実証と分析の密度の高い報告だった。

各論第3部の、貧困の特定要因または貧困の特定現象については、米国厚生教育部の高官ショール氏が住居と貧困の悪循環を取扱い、外にロンドン保健経済局のマケンジー氏の貧困者と栄養摂取の関係についての報告があった。その他関連事項として、意識調査、生活実態調査におけるアンケート方式の功罪についての批判的報告が、ロンドン大学のベルソン氏によってなされ、同様な方式による集計結果の報告が、ウィエナ大学のローゼンメール教授によってなされた。ベルギーのデュビュスト教授も、類似の問題について報告する予定だったが、あいにく病欠、おしまれた。

以上で、報告者と報告内容の紹介を終るわけだが、セミナー期間の前半部において、令名の高いティトマス教授が特別出席され、各報告者ごとに、または総括的に、適切なコメントを与えてくださったことは特筆に値する。さすがに、所得分配論、福祉国家論の泰斗である教授の発言には、千金の重みを感じられた。貧困研究における、研究者の姿勢に言及された際、貧困者を研究の対象としてのみ取扱い、人間的理解を欠くおそれがあること

を指摘され、「貧困者と共にある」という基本的姿勢の重要性を強調されたことは感銘の新たなものがある。

たしかに、セミナー参加者の討論や意見交換においては、ややもすれば、問題を「貧困」という抽象的概念に昇華させ、「貧困者」という人間の把握にかけるところがあるように思えた。これにはもちろん、研究者自身の側に、理解できないこともない人間的事情があったことも見逃がせない。「貧困者」について語るとき、貧困者でない語り手には、どうしても一種のうしろめたさがつきまとうものであって、そのために、問題を「貧困」へと抽象化させ、「貧困者」のかなしくも、いたましい現実から、討論の間だけでも逃避しようとする気持があるのではなかろうか。貧困のきびしい現実に人間的同情をよせ、人生の哀歎に深い理解をもつことは、貧困研究者の基本的資格ではあろう。だからといって、研究会が情に棹さして、お通夜や祈禱会のようになってしまうのは、貧困解消のために、社会科学を役立てようという、せっかくの善意と決意にもとる結果になるおそれがある。幸いにして、このたびの研究会は、各自の基本的姿勢については、事前に、直接的接触または著書論文等を通じての間接的理解をもった人々の集りであったために、感情的基盤にはかなりの程度まで共通のものがあり、研究成果の技術的、論理的批判と討論を通じて、今後の研究活動におけるお互いの姿勢を正し合うことができたように思えた。

附記：エセックス大学国際貧困セミナーにおける報告と報告者。

- PETER TOWNSEND, Comparative Measures of Poverty in High Income and Low Income Countries.
 H. GANS, Methods of Studying Life-Styles of Poverty.
 S. M. MILLER, Poverty and Social Stratification.
 M. REIN, Problems in the Definition and Measurement of Poverty.
 B. ABEL-SMITH, The Problem of Establishing Equivalent Standards of Living for Families of Different Composition.
 KOJI TAIRA, Public Assistance Standards as a Measure of Poverty in Different Countries.
 O. BLUME, Urban and Rural Poverty Among the Aged in Germany.
 Mrs. D. WEDDERBURN, A Comparative Analysis of the Standards of Living of the Aged.
 ABBÉ J. WRÉSINSKI, Urban Poverty: Bidonvilles in Paris.
 Mrs. MUNKE, Urban Poverty: Berlin and Other German Cities.
 V. AUBERT, Rural Poverty and Community Isolation.
 A. SHORR, Poverty and Measures of Housing.
 J. MCKENZIE, Poverty: Food and Nutrition Indices.
 W. A. BELSON, Problems of Conducting Surveys of Poverty.
 C. DEBUYST, Problems of Interviewing and Interpretation.
 L. ROSENMAYR, Cultural Poverty of Working Class Youth.
 Poverty and Social Policy: Discussion.
 Chairman of the International Committee on Poverty Research
 Dr. HENNING FRIIS, Director of the Danish National Institute of Social Research, Copenhagen.
 Secretary of the International Committee on Poverty Research
 Mlle. A. A. de Vos Van Steenwijk, Director, Bureau de Recherches Sociales, Association "Aide à Toute Détresse", 53 Rue de la Fontaine-au-Roi, Paris XI.